

# 津山と神戸の旅 2020



2020年10月

旅のチカラ研究所 植木圭二

今回の旅は友人との再会が目的という私にしては珍しいテーマで、岡山県津山市と兵庫県神戸市とそれらの近郊に行ってきた。旅の連れ合いは船旅で知り合った大先輩だ。

## ■再会の旅

今回の旅のきっかけは1カ月程前に鳩原（にゆうはら）さんに行った伊豆の旅で、彼とは地球一周の船旅で知り合い、私より22才年上の大先輩ながら時々旅のお供をさせてもらっている。

伊豆の旅の最中に何か面白い旅の企画はないかなどと話をしていたら、何となく頭に浮かんだのが岡山県津山市だった。津山には私と彼との共通の友人が住んでいる。そして話を前に進めたのは二人とも津山は訪れたことも通過したこともない数少ない未踏の地だった。

津山まで行ったら近くの友人たちとも再会をしようとなつて旅のテーマを“再会の旅”として、その付近で行ったことのない「竹田城跡」さらに「有馬温泉」も加えて、トントン拍子で旅行日程が決まっていた。

津山は岡山県で3番目に人口が多い城下街だが、県の中東部で中国山地の中にあり交通の便はあまりよくない。従って新幹線で行って現地でレンタカーを借りることにした。

第1日目は新幹線の車内で鳩原さんと落ち合い姫路で下車した。私たちの“再会の旅”を出迎えてくれたのは世界遺産で国宝の「姫路城」だった。

## ■桔梗屋

レンタカーに乗り換え今度は姫路城に見送られ、約2時間後に津山に到着した。ホテルにチェックインして待っていると今回最初の再会相手「キキちゃん」が迎えに来てくれた。

彼女とは2年半前のオセアニアクルーズで一緒になった。船内で鳩原さんが開催していた俳句教室の生徒であり、私が入っていた落語会の同門になる。彼女自身も話し方教室を開いていたりして積極的な活動をしていた。

彼女は津山でビルのオーナーをしており、そのビルの中で「桔梗屋」という洒落た料理屋を開いている。私たちは桔梗屋に案内され、嬉しいことに本日は店を開けて私たちのもてなしに専念してくれるという。

店にはカウンター席とテーブル席があり、鳩原さんと私がカウンター席の真ん中に座って彼女がカウンターの中に入って料理を作りながら私たちの相手をしてくれる。それはまるで遠路遙々旧友を訪ねてやって来た二人の紳士が美人のママを相手に昔話に花を咲かせるというドラマのワンシーンのような光景になった。

カウンターテーブルの上には花瓶があって小さな生花が何本もさしてある。彼女がその花を茎からちぎって、私たちの目の前に一本ずつ置いた。私は彼女が何をするのかと見てみると、そこに箸を乗せて生花をお洒落な箸置きにしてくれた。箸袋は桔梗が入ったオリジナルデザインで、さらに破魔矢のような小さな矢が付いている。細部にわたって凝った演出がされている。

そのこだわりは料理にも表れて、酒のつまみに合いそうな美味しい地元の珍しい料理が次から次へと出てくる。



<生花の箸置きに乗ったオリジナルデザインの箸袋>

まずは「さい干し」という珍しいつまみが出てきた。牛肉を塩漬けにして少し乾燥させ、軽く火で炙った料理だという。これが絶妙な味で信じられないほど美味しい。日本生まれの保存食というがビーフジャーキーに通ずるものがあり、酒のつまみには抜群に合う。

この肉はリブフィンガーと呼ばれている部位でアバラ骨の間に付いている肉だという。マグロの中落ちとほぼ同じ部分なので脂がのっていてコラーゲンも豊富で旨味が凝縮されている。

さい干しは他の地域では馬肉で作るらしいが、彼女の話ではかつての津山は牛肉文化だったのでその名残で牛肉になっているという。もちろんそれは昔のことで「今はどんな肉も美味しいのよ」と誇らしげに付け加えたのがとても印象的だった。

地元では「マコモタケ」と呼んでいるセロリのようなものが出てきた。この食材そのものには特に味がある訳でないので鍋料理に入れて出してくれて、シャキシャキした独特の食感で如何にも食物繊維が豊富そうに感じる。

マコモタケは聞いたこともない食材なので、その場でスマホを使って調べてみると「真菰筍」と書くからキノコではなくタケノコ的一种と思ったら、沼や水田などの水辺に生えているイネ科の多年草で低カロリーの健康食品として近年注目されていると書かれている。

津山は「ホルモンうどん」が名物で、市内にはそれを出すお店が 50 軒以上あるという。ホルモンうどんとはいわゆる焼きうどんで、具が普通の肉ではなくホルモンになっている。昔から畜産業が盛んな地域なので食肉処理センターがあり、鮮度の良い臭みの少ない新鮮なホルモンが手に入る所以この名物が生まれたらしい。

彼女はそんな説明をして桔梗屋独自のホルモンうどんを作ってくれた。味はもちろん美味しい。

デザートには「ポポー」という果物が出てきた。またしても私が初体験のもので、見た目はアケビのようなのでアケビカキとも呼ばれているという。味と香りはマンゴーとバナナとドリアンを混ぜたようで、かなり濃厚でももちろん甘くて美味しい。

これもまたスマホで調べると、明治時代に日本に入ってきた北米原産の果物で、甘いので「森のカスタードクリーム」との別名がある。戦後は食の選択肢が増えたのでいつの間にか忘れ去られて、昨今は幻の果物になってしまった。そんな果物をこの地域では普通に食べている。

その他にも地元の珍しくて、美味しい料理が出てきた。いや、珍しいと思うのは私たちだけでここでは当たり前なのかもしれない。それらの料理を通してこの地域の歴史や文化を知ることができた。恐るべき津山、恐るべき桔梗屋、そしてキキちゃんだ。

もう一つ恐るべき話は、カウンターの棚にはウイスキーを中心に高価な銘柄の酒がズラリと並んでいる。彼女はウイスキーが好きでその造詣もなかなか深い。スコットランド大好きでスコッチウイスキー通の鳩原さんとはウイスキー談議で盛り上がっていた。

彼女の話は酒や料理だけのことではない。彼女はテレビのレポーターや結婚式の司会をやって、このビルを建てて2人の子供を育てたという。そんな彼女の波乱万丈の人生を今宵改めて聞いた私は、自叙伝でも書いたらどうかと彼女に話を向けると、「それなら植木さん、ゴーストライターやってよ」と頼まれる始末だ。そして彼女いわく「内容は多少足しても引いても構わないから、売れる本にしてね」と言う。

自叙伝を売れる本にしてくれという発想には本当に恐れ入ってしまった。

## ■趣のある歴史の街

第2日目は3人で津山とその近郊の観光だ。

街の中心にある「津山城跡」を訪れる。説明書きによれば津山城は本能寺の変で討死した森蘭丸の弟の森忠政が1616年に築城した。しかし明治政府の廃城令によって取り壊された。それでも1936年に鉄道開通を記念した博覧会で往年の2/3のサイズで天守閣が作られて、“張りぼて”の愛称で親しまれた。太平洋戦争では空爆の目標になるからという理由で再度壊され、現在は天守閣がない。近年になって備中櫓が復元され、その中に入ることもできる。

ボランティア説明員の話ではこの櫓だけでも何億円もかかったというからかなり立派なものになっている。城は10m以上の高い重厚な石垣が複雑に張り巡らされ、実に立派な城だったことが分かる。廃城令がなければと思うのは私だけではないはずだ。



<津山城跡の石垣と備中櫓>



<備中櫓の内部>



実は昨日私たちを見送ってくれた姫路城でさえも廃城のために競売に出された。当時の金で 23 円 50 銭、現在の貨幣価値では約 10 万円で落札された。しかし莫大な解体費用がかかり、結局そのままになり権利も消失した。一步間違えば人類の大損失になっていたかもしれない。

津山城跡の北方向に約 1km 離れたところに津山市役所があるが、そこに城の石垣の跡が残っている。津山城は相当に大きな城だったことを物語っている。

市役所の近くには「聚楽園」という津山藩別邸庭園がある。これも見事な庭園で往年の津山藩の藩勢が分かる。そんな凄い庭園を入场料も取らずに無料開放しているからありがたい。

この街は意外に住みやすそうに思えてきた。

津山駅に隣接して「津山まなびの鉄道館」という JR 西日本が運営している施設がある。鉄道開通で博覧会をやるくらいだから鉄道は地元の切なる願いだったに違いない。

だからなのかここには車両の向きを変える転車台と扇方の機関車車庫がある。現在も稼働しているような施設で、迫力もあって躍動感がある。

私たちが行った時には大勢の小学生たちが先生の引率で見学に来ていた。本物の車両は子供たちに人気があるが、街全体と鉄道の関係を俯瞰できるジオラマの鉄道模型にも人気が集まっていた。担当の若い女性 JR 職員が、楽しそうにそして思いを込めて私たちに説明してくれた。その説明を聞いていると彼女がこの街も鉄道も大好きだということが伝わってきた。私がそんな彼女を褒めちぎったらジオラマ模型の転車台をサービスで動かしてくれた。



< 転車台と扇方の機関車車庫 >



< ジオラマ鉄道模型 手前が転車台 >

津山からずっと北上して鳥取県との県境にはかつてウラン鉱山で有名な「人形峠」がある。それは約 50 年前に中学生だった私がテストのために丸暗記した地名だ。今回はその丸暗記した場所と現実を重ねるために訪ねてみた。今はウランの採掘はしていないが研究施設はあるようで人形峠アトムサイエンス館なる看板がでていた。

最近の私はテストのためだけに暗記した場所に行くことが多々ある。そして新たな発見も多い。例えば山形県の尾花沢は銀の採掘で有名でそのことを何の脈絡もなく覚えた。50 年後に訪れた時には銀山は廃坑になっていたが、情緒豊かな「銀山温泉」として復活していた。

この人形峠も丸暗記した懐かしい場所で今回再会を果たした。今回の旅のテーマは再会の旅だった。

津山のほぼ真北の山の中に「奥津温泉」というややひなびた温泉街がある。温泉宿がいくつかあり、その中の「奥津荘」という宿がキキちゃんのお勧めで、立ち寄り湯をする。

お勧めの理由は、昔この温泉を訪れたお殿様がこの宿の湯が大そう気に入ったので、湯を出る時に鍵をかけて誰も入れるなど言ったことからその湯を「鍵湯」と名付けたというエピソードが残る由緒正しい温泉宿である。

なぜ鍵までかけたかという、この宿の下から湧いている源泉が湧出温度 42℃という入浴には適温で、湯量も多く源泉の湧き出し口そのものが湯船になっている。つまり湯船の底から直接温泉が湧き出ている。それは生命の源とも言える地球のエネルギーを誰の手にも触れられることなく直接享受することになる。

それ故なのか、鍵湯に入ると湯の透明度が高い。湯船の下にある石が驚くほどはっきりと見ることができる。上から見ると分からないが、深さはまちまちになっており石がゴロゴロしている。それがまた趣があって、殿様が鍵を掛けさせたことも納得できる。

湯船の下から湯が沸き出ている温泉施設は私の知る限りでは蔵王温泉の共同浴場「河原湯」くらいで、相当に珍しい。



<奥津荘の玄関>



<奥津荘鍵湯の湯船>

道の駅奥津温泉には「温泉亭」という食事処がある。これが田舎料理としては珍しいビュッフェスタイル、つまり食べ放題のバイキング方式になっている。煮物、揚げ物、漬物、そしてこの地方の名物料理も食べることができる。地元の主婦たちが腕に寄りをかけて作っている逸品は田舎料理などと言って決して侮れない。

本日の夜もまた桔梗屋で珍しい美味しい食材や料理をご馳走になり、さらなる旧交を深めることになった。本当にありがたい、再会の旅に感謝したい。

## ■竹田城跡

第3日目は津山を離れ、鳩原さんと2人で兵庫県朝来（あさごう）市の「日本のマチュピチュ」と呼ばれる「竹田城跡」にやって来た。

雲海に浮かぶ石垣の城跡ということで上手いキャッチコピーを付けたものだと感心するが、今年の春に本物のマチュピチュ遺跡を訪れて感動をしてきた私にとっては、この日本のマチュピチュなるものの真価を確かめたくやってきた。その思いは鳩原さんも同じでマチュピチュ遺跡は世界各地を旅する者にとって絶対的なものになっている。

山の上にある竹田城跡には最後まで車で行くことはできない。専用バスやタクシーを駆使しても少なくとも 1km 程は山道を登ることになる。

竹田城の最高所の天守台は標高 353m に位置し、規模は南北 400m、東西 100m で、山城としては大きい方だろう。城は 1443 年の完成し、関ヶ原の合戦の 1600 年で廃城になったので、現在まで 420 年間も建物が何もない石垣だけの姿をさらしている。

一方のマチュピチュ遺跡はインカ帝国の皇帝が保養や信仰のために時々訪れる都市だった。インカ帝国が 1438 年に成立してその後作られ、1533 年にインカ帝国はスペイン人によって滅ぼされたが、マチュピチュは標高 2400m の高い山の上にあってスペイン人に発見されることなく自然に人がいなくなり廃墟になった。従って隆盛と滅亡がほぼ竹田城と同時期になる。規模においてもほぼ同サイズでこの 2 つの遺跡は意外に似ており、実に興味深い。

実際に竹田城に登ってみる。本日はあいにくの雨で、雲海とまでいかないまでも霧の中にかすむ竹田城を見ることができ、何となく良い情景になっている。

城は石垣しか残っておらず、その意味では昨日行った津山城のようだが、平地にある津山城の方が石垣も規模も大きい。しかしながらこの山の上にこれだけの石垣を積み上げたことは驚くばかりだ。



<竹田城跡 天守台から見下ろす>

城内を歩くと、足元は全て灰色の布のようなものが敷いてある。これが不自然で如何にも軽薄な感じがしてどうも馴染めない。石畳か土のままになっていれば良いのにと思うのは私だけだろうかと思って鳩原さんに同意を求めると、やはり同じことを感じていた。

さてこの城の見せ場は雲海の中にたたずむ姿であって、城を紹介する写真ではそんなショットが多い。残念ながら一般の観光客はこの城に登ってもそれを見ることができない。その姿を見るためにはドローンを飛ばすか、隣の山に登らないといけない。



マチュピチュ遺跡の場合はワイナピチュ山や太陽の門に登れば斜め上から遺跡を見ることができるのでこの違いは大きい。

願わけば、竹田城跡を斜め上から展望できる場所があればありがたい。そしてあの灰色の布をやめたならば、日本のマチュピチュを名乗ってもいいだろうというのが二人の意見になった。

#### ■ トニー&レイニー

竹田城跡を後に神戸に向かう。夕方から船旅で知り合った友人と神戸で会う約束をしている。

その友人とは神戸在住のトニーで、彼は地球一周の船旅の時に私と同じ英会話教室に入っていた。芸達者でアクティブな彼はその時の船旅で知り合った彼女レイニーと結婚をして現在 82 才にして新婚生活をおくっている。一応断っておくとトニーもレイニーもどちらもニックネームなのでともに日本人である。

本日はその新婚さんに会うことになっており、神戸三宮で待ち合わせをしている。彼らとは鳩原さんも旧知の仲で久しぶりの再会になる。店は彼らが予約してくれた。

彼らと再会し店に入る。すると積もる話が次から次へと出てくる。船内での話、下船してからの話、結婚の話、様々な話が寄せては返す波のように出てくる。

その中でも、さすがと思ったのはこの新婚さんは現在夫婦そろって神戸市の市民大学に通っている。そして 86 才の鳩原さんも大学に通っているので、一番若い私だけが大学に行っていないということになる。

生涯勉強という高い志は楽しく充実した人生を送る原動力になるのかと思い、私も今回の旅を終えて地元に戻ったら大学を探す気持ちになってきた。

そんな話で盛り上がっているとトニーからは「明日はどうする？」と質問される。

私は明日も地球一周の船旅で知り合った別の友人グループと会うことになっている旨を伝えると、驚くことにトニーはそれにも参加したいと言い出した。

友達の輪が広がるからと鳩原さんは是非にと言っており、私も同じ船に乗っていたので知らない仲ではないだろうとウエルカムの姿勢を示す。ただレイニーはそれを制止するような態度を取っている。おそらく明日のメンバーをあまりよく知らないので不安なことと急な参加は店の予約変更などで大変だろうという極めて常識的な判断が働いているのだろう。

私は平日の昼から飲むので店は予約していないことを伝え、朝から有馬温泉に行って皆で日帰り入浴&ランチをすることも付け加えた。

有馬温泉は新婚夫婦の家から近い。トニーがレイニーを説得にかかり、私たちの援護射撃もあってレイニーも含めて参加することになった。この人たちの決断力と行動力には恐れ入ってしまう。

そうすると 8 人での会食になるが、コロナ禍なのであまり密になりたくなく、適当な店を探すことになった。すると誰からか「この店はどう?」、「今もお客は我々だけで明日も大丈夫かも」などという意見が出てくる。

早速トニーに交渉してもらおうと店主はふたつ返事で OK してくれた。コロナ禍でお客が減っているのに店にとっても渡りに船なのだろう。さらに開始時間を店の開店 2 時間前にしてもらい無理やり店を開けてもらう交渉をする。店主は少し驚いた顔をしたが直ぐに OK になった。

これで 2 夜連続して同じ店で飲むことになるが、貸し切り状態で他のお客に何の気を遣うこともない。

#### ■有馬温泉で再会

第 4 日目は朝から有馬温泉に向かう。有馬温泉では有名な「向陽閣」という旅館を日帰り入浴とランチで予約してある。

三宮駅前では有馬温泉行のバスを待っていると偶然にも本日の参加メンバー「ヨッチちゃん」と出会う。彼は京都に住むツーリングと山登りが好きな男だ。有馬温泉駅に着くと「姉ちゃん」が待っていてくれた。彼女は姫路在住のアクティブな山ガールだ。間もなくトニー&レイニーが駅にやって来た。あとの 2 人「横ちゃん」と「ヒデさん」からは宿で待っていると連絡が入る。横ちゃんは和歌山に住む海の男でヨットマン、ヒデさんはゴルフの腕前がプロ級の大阪人だ。

ホテルのロビーで 8 人全員が揃う。

トニー&レイニーは初対面かもしれないと心配していたが、「あの時、フラダンスをやっていたでしょ！」などと既に話が弾んでいる。何しろ 100 日以上も一緒に船に乗って生活しているとどこかで顔を見ており、同じ船内イベントに参加していることの方が多い。ただ名前までは憶えていないので顔を見れば「ああ、あの時の」ということになる。それにここに集まっているメンバーは船内でもアクティブに活動をしていた人たちだから、知らないはずはない。

#### ■有馬の湯

日帰り入浴なので早速温泉に入る。向陽閣には大浴場が 3 つあり、どれに入るか迷ってしまうほどだが、源泉は同じなので一番大きな「一の湯」を選んだ。もちろん男女別なので男 6 人での入浴になるが、湯殿も湯船もとんでもなく広い。おそらくは 100 人くらい同時に入っても全く窮屈な感じがしない広さだ。カランの数だけでも 30 以上あり、湯船は露天風呂含めて 5 つもある。本日は運悪く関西地方に台風が接近しており、そのため入浴客がおらず一の湯は私たち 6 人の貸し切り状態になっている。

日本三名湯とか日本三古泉とか日本三大温泉とか、いろいろな呼び方で日本を代表する 3 つの温泉が選ぶことがあるが、どのように 3 つ選んでもほとんど有馬温泉は選ばれる。

それほどの名湯なのに自称温泉マニアの私にとって初体験で、全くもって恥ずかしい話である。

温泉の成分表を見ると驚くべきことが書かれている。湧出温度が 100.5℃となっている。私は各地の温泉約 350 湯を巡っているいろいろな成分表を見ているが、湧出温度が 100℃を超えているのは初めて見る。そもそも水は 100℃を超えると液体でいられないから、水蒸気を多く含んで湧出していることになるのだろう。



さらに成分表を見ると高張性の湯になっている。高張性というのは温泉濃度が高いことを意味しており、人間の体内よりも浸透圧が高い。従って体内に温泉成分が吸収し易くなり、入浴すると“濃い”とか“効く”と感ずることが多い。

日本各地にはあまたの温泉があるが、高張性の湯は少ない。私の経験値で申し訳ないが、20湯に1つくらいの割合だろう。一昨日行った奥津温泉ももちろん低張性だった。

私は温泉の泉質を評価する場合、3つ指標を見ることにしている。まず酸性度のpH、湧出温度、そして高張性・低張性だ。

有馬温泉そして向陽閣には金泉と呼ばれる鉄分を含んだ茶褐色の湯と、銀泉と呼ばれる透明の湯がある。私はまず金泉に浸かってみた。

その感想は濃い、しょっぱい、温まるといったところだ。茶褐色なので視覚的にも温泉の濃さが増しているようで、いかにも効能があるような気持ちにしてくれる。



露天風呂に浸かってくつろいでいた仲間たちに成分表の話をする。湧出温度 100.5℃はさすがに驚いたようで、高張性については地元関西に住んでいてもあまり気にしていなかったようだが、この湯を愛した太閤殿下はお目が高いなどと言っている。やはり関西は太閤殿下の人气が高い。

<向陽閣の一に湯 露天風呂>

それにしてもこの広い風呂に6人だけ、効能抜群の歴史ある湯に浸かって、地球一周の船旅を語るのには実に爽快だ。

入浴してランチ、そして再び神戸三宮に戻り飲み会に突入する。

瞬く間に時間が過ぎて、気が付いたら「また会いましょうね」という言葉を発していた。

## ■懐かしい大阪

第5日目の旅の最終日は、大阪で串揚げとお好み焼きを食べようと考えていたが、台風が気になり早々に新大阪から新幹線に乗って帰途につく。

私は20代後半に2年間ほど大阪に住んでいたため、今回の旅の最後の再会相手は大阪という街になった。大阪には頻繁に来ているが、改めて懐かしさを感じた。

この“再会の旅”というテーマ設定は意外に面白く、大正解だったようだ。

## ■温泉評価委員会

私は温泉宿を評価する温泉評価委員会、通称「おひょい」を立ち上げている。それは温泉宿に泊まった時に組織される勝手気ままな委員会で、委員は同行した人になる。何が良かったとか悪かったとか、あれこれ話し合っって各項目を5段階で評価し、委員会として評価値を算出する。

評価の基準は、5は驚き感動、4は普通に良い、3は可もなく不可もない、2は普通に悪い、そして1は失望落胆としている。

総合点（平均値）で5段階の75%、つまり3.75をオススメの目安としている。特に4.00を超えるには驚き感動が少なくとも1項目以上あるからオススメ度は高い。

奥津温泉奥津荘は立ち寄り湯なので評価項目は限定されて、泉質4、風呂5、建物・部屋4、立地環境3、総合点4.00になった。

泉質は低張性アルカリ単純泉、pHは9.1、湧出温度は42℃となっている。

有馬温泉向陽閣にも宿泊していないが、泉質5、風呂5、料理4、コスパ2.5、サービス4、建物・部屋4、立地環境4、総合点4.07になった。コスパの2.5は少々厳しめの評価で実際に宿泊すると変わる可能性もある。

金泉、銀泉ともに泉質は高張性中性高温泉、pHは6.34、湧出温度は100.5℃及び98.1℃となっている。

## ■旅の記録

実施は2020年10月6日（火）～10日（土）の5日間、その行程を以下に示す。本文中の順番とはやや異なる部分もある。

- ・1日目 10時自宅出発、11時21分新横浜発新幹線にて姫路着、レンタカーで津山着  
桔梗屋にて夕食、津山セントラルホテル・タウンハウス宿泊
- ・2日目 8時30分ホテル出発、津山城跡散策、津山まなびの鉄道館見学、  
奥津温泉奥津荘で入浴、道の駅奥津温泉の温泉亭で昼食、人形峠、奥津溪谷、  
津山市内に戻り鳩原さんの知人の和菓子屋「鶴聲庵」訪問、聚楽園散策、  
桔梗屋にて夕食、ホテル連泊
- ・3日目 7時30分ホテル出発、9時30分竹田城跡近くの「山城の郷」到着し駐車、  
バスで竹田城跡駐車場へ行き竹田城跡見学、  
竹田城跡近くのうどん屋「一心竹田店」で昼食、姫路でレンタカー返却  
在来線で神戸に移動、神戸三宮で谷夫妻と会食、東横イン神戸三ノ宮2に宿泊
- ・4日目 9時30分ホテル出発、バスにて有馬温泉に向かい有馬温泉到着  
有馬温泉「向陽閣」で立ち寄り湯と昼食、バスで神戸三宮に戻り会食、  
ホテル連泊
- ・5日目 9時30分ホテル出発、在来線で新大阪まで移動し新幹線にて新横浜着、帰宅

全て含めた費用は一人当たり約6万6千円になった。半分以上は交通費で、宿泊費はGOTOトラベルとツインルーム利用によって相当安く抑えられている。内訳の詳細を以下に示す。

- ・交通費は 38085 円
  - JR 横浜-姫路往復と新幹線自由席で 27970 円
  - レンタカー、ガソリン代、高速道路料金の合計 17610 円、一人当たり 8805 円
  - 山城の郷→竹田城跡バス代 320 円
  - 神戸三ノ宮→有馬温泉バス代 780 円※（高速バス）、710 円（路線バス）
  - ※GOTO トラベルの地域クーポン券を利用してこの額から一人 500 円引き
- ・宿泊費は 11348 円（GOTO トラベル適用済、どちらも一人当たりに換算）
  - 津山セントラルホテル・タウンハウスで朝食付ツインルーム 5975 円（2泊分）
  - 東横イン神戸三ノ宮 2 で朝食付ツインルーム 5373 円（2泊分）
- ・飲食費は約 15850 円
  - 1 日目昼食（新幹線車内にて、おにぎりとビール） 500 円
  - 2 日目昼食（温泉亭） 1300 円
  - 3 日目昼食（一心竹田店でうどん） 950 円
  - 3 日目夕食（神戸三ノ宮のパリ食堂で会食） 3000 円
  - 3 日目夜（缶酎ハイ） 150 円
  - 4 日目喫茶（有馬温泉駅前喫茶店） 400 円ただし GOTO 地域クーポン利用で無料
  - 4 日目昼食（有馬温泉向陽閣で日帰りランチとビール） 約 4100 円
  - 4 日目夕食（神戸三ノ宮のパリ食堂で会食） 4200 円
  - 4 日目夜（缶酎ハイ） 450 円
  - 5 日目昼食（新幹線にて柿の葉寿司とビール） 約 1200 円
- ・その他費用は 1040 円
  - 津山城跡入場料 300 円
  - 津山まなびの鉄道館 240 円
  - 奥津温泉奥津荘立ち寄り入浴 1000 円（ただし GOTO 地域クーポン利用で無料）
  - 竹田城跡入場料 500 円